

襟を少し持ち上げる仕草。

『屋根裏で会おう』という合図を使って屋上に呼ぶ出すことが成功した。少なくともスザクもルルーシュを覚えていたことに安堵し、微笑む。

「元気にしていたか？」

「おかげさまでね。ルルーシュは、その…」

「気にしなくていい。皇位継承権は自ら放棄したんだ」

当時齡十三にしても皇女が皇位継承権を放棄というのは小規模ではあるが世界的なニュースだった。もちろんスザクも知っていたのだらう、言わんとすることを読み取って気にしないようにと釘をさした。

「それならいいんだけど…」

それにしても、とスザク。

「ルルーシュは綺麗になつたね」

「何言ってるんだ」

ストレートな褒め言葉に何とも言えない恥ずかしさが込み上げてすつと視線を逸らすルルーシュ。

昔はこんな風に賛辞を贈るような性格ではなかったはずなのに、と照れ隠しに考える。

「でも…」

ふいにスザクは言葉を区切り視線を少し落とす。

「ん？」

「ここはあんまり成長してないね」

「な!？」

こともあろうか（本人は気にしていない素振りを見せているが実際はかなりコンプレックスとなっているお世辞にも大きいとは言えない）乳房に手を押し当ててきた。

そのいきなりのあまりに自然な動きでどうしていいかわからなくなりルルーシュは軽くパニックを起こす。しばらく勝手に触らせたままだったがようやく落ち着いて、どうしていいかわからず固まっていた両手をやつと動かしてスザクを放した。

「な、何するんだ!」

「あ、ごめんごめん。つい…」

「つい、で許されるか!」

へら、と笑顔で返すスザクに叫んだ。

「なんだ?つい、で女の体を平気で触れるような環境にいたという事なのか?日本はそんなふしだらな所だったのか!？」

悶絶しているルルーシュの様子に気づいていないのかスザクは変わらない態度で言葉を返す。

「だって…すぐく僕好みの胸してたから、つい…」

「…は?」

何を言われたのかよくわからず呆然としているルルーシュに

スザクは独り言のように話し出した。

「僕、貧乳が好きなんだ。貧乳っていうか手で包めるくらい丁度いいサイズ。やっぱりいくら女の子特有のものって言っても大きすぎるのとはどうかと思うんだよね。その点ルルーシュはすごい理想！触り心地も良かったし、しかも肌も白くてすごい綺麗だね。腰から脚のラインとかトータルバランス完璧……いいなあルルーシュ」

長く熱く女体への思いを語ったスザクはうっとりとした眼差しをルルーシュに向け微笑んだ。途端にルルーシュは頭痛を覚えた。

いつの間に自分の幼馴染はこんなに変態になってしまったのだろうか。

あの硬派で怒りっぽく男気溢れていた日本男子の誇りを胸にしていた彼はどこにいったのだろう。遠い目をして7年前に思いを馳せた。

「でもまた会えて嬉しいよ」

ああでも太陽に好かれそうな暖かい笑顔は変わらない。

「そうだな。よろしく……」

スザクの満面の笑みに、ルルーシュはどうしても引き攣る顔で笑みをつくって返した。

七年前の想い人に、また会えたという純粋な嬉しさよりもこ

の先の不安感が否めない再会となった……。

「とりあえず教室に戻ろうか」

というスザクの提案を飲みこんで、歩き出した方がいいがその光景にすれ違う生徒たちがざわめき出し教室に戻った時には大騒ぎだった。騒ぎの元に心当たりがないルルーシュは何事かと思ったが、特に突き止めることもせず残りの一日を過ごすのだった。

「ルル、あの転校生と知り合いなの？」

放課後、転入初日と言うことで職員室に呼ばれたスザクが教室を去るとすぐさまシャリーがオレンジ色の長い髪を揺らして駆け寄ってきた。

「え？」

「特別親しかったのって生徒会くらいじゃない？なのにあんなに仲よさげにしたから。みんな気になってるんだよ」

「そういうことか……」